

SA 活動の学びと現代社会に求められるスキル ーデジタル社会と対話ー

高橋 美桜 (松山東雲短期大学 現代ビジネス学科 2年)

遠山 敦子 (松山東雲短期大学 現代ビジネス学科 助教)

1. はじめに

本研究は、第1筆者が短期大学2年次前期に経験した「SA (Student Assistant ; 以下SA とする)」の活動を振り返り、そこで培われたスキルや自身の成長について整理すること、さらに、SA活動を通じて感じた「対話」の重要性について考察することを目的とした。なお、本稿では主にSA活動の概要報告と自身の成長について先行研究を参考に考察し、SA活動を通じての対話に関する考察は、ポスターセッションで報告する。

2. SAの概要と活動内容

本学科ではICT活用能力を身につけるため、1年次前期からパソコンを使用した科目が複数設置されている。入学時点では学生それぞれのパソコンスキルに差があり、担当教員だけでは指導が行き届かない懸念があった。そのため、2023年度からSA制度を導入することとなった。

第1筆者は2024年度前期科目「情報リテラシー」(1年次必修)でSAを務め(表1)、授業中のサポートの他、授業時間外の「学びのサポートルーム」や個別対応、さらに高等学校の出張授業でもSAとして活動した。「情報リテラシー」は、前半で表計算ソフトウェア (Microsoft Office Excel) の使い方を演習形式で学び、後半ではウェブページの構造をつくるHTMLや仕組みについて理解することを目的とした授業である。授業におけるSA活動については、主に教員の解説に合わせて学生がPC操作をする際の補助や、作業中の個別質問への対応、作業が中断している学生への声かけなどであった。本科目は、第1筆者も1年次に履修しているが、2024年度に追加された内容もあることから、担当教員が授業時間以外で

の打ち合わせ時間を定期的に設けることや、授業で使用する資料を事前に共有し予習する時間を確保するなど、SAが活動しやすくなるよう考慮いただいた。

表1 「情報リテラシー」でのSA活動

日付	回	内容
4/9 火		初回打ち合わせ:SAの概要とスケジュール
4/16 火		事前打ち合わせ:当日の段取りを確認
4/26 金	1	情報リテラシーの概要
5/1 水	2	データ入力と分析(構成比・条件付き書式)
5/10 金	3	表の作成(ピボットテーブル)
5/13 月		当日の段取りを確認
5/17 金	4	グラフの作成(COUNTIF・IF関数を用いて)
5/24 金	5	アンケートをもとにデータに置き換える
5/31 金	6	相対参照、絶対参照、関数
6/7 金	7	試験 ウェブデザインの構造
6/14 金	8	「progate」を使って、ウェブ作成の初歩を学ぶ
6/19 水		当日の段取りを確認
6/21 金	9	HTMLの基礎
6/28 金	10	CSSを使いこなしウェブデザインする
7/5 金	11	グローバルナビ付きのウェブサイトデザインする
7/5 金		当日の段取りを確認
7/12 金	12	自分が考えてウェブサイトを作成する
7/16 火		SA活動の振り返りシート受領
7/26 金	14	自分が考えてウェブサイトを作成する(つづき)
7/26 金		SA活動の振り返りシート提出

3. SA 活動振り返り（先行研究との比較）

第1筆者はSA活動を通じて、自身の成長を実感しており、SA活動終了時に担当教員と実施した振り返りなどでの自身の気づきを記録していたことから、本研究ではその内容についてさらに整理することとした。整理に際し、岩崎ら(2012)のTA(Teaching Assistant;以下TAとする)の成長に関する先行研究の記載と、自身の振り返り内容を比較することで、SA活動による学びや成長を客観的に評価することとした。

岩崎ら(2012)では「TA活動にやりがいを感じましたか」という質問について、90%が「そう思う」「ややそう思う」という回答であった。また「TAを経験して、自分が成長したと思いませんか」という質問は「そう思う」44%、「ややそう思う」44%の回答であった。これら2つの質問に関する回答は、自身の実感とも共通しており、学生がSAやTAなどの教育補助者として関わることはやりがいや成長実感を伴うものであると言えることが確認された。さらに、自身がSAとしてやりがいを感じた場面である「支援した学生が理解したと感じられた」ことは、岩崎ら(2012)で示された「やりがいを感じた理由」の中で、「学生の理解の深まりに役立つことができるから」への回答が59%と最も高くなっていることとも合致している。その他、「自分自身の専門知識に対する理解が深まるから」(41%)、「学生とコミュニケーションをとる力が身につくから」(56%)という結果についても、SA自身が授業内容を理解していなければ受講生に説明できないことは大前提であり、それをわかりやすく伝えるためにどうすればよいかを考えて授業に臨まなくてはならないと感じたことと合致するものであった。

また、岩崎ら(2012)のインタビュー結果のまとめにある「TAは担当教員による教育を受けている」という点についても、自身の実感とも合致している。受講生から質問を受けた内容について、自身で解決できない場合に教員に伝達して対応を求めたことや、打ち合わせ時に前回授業での対応について教員から助言を得たことなどは、SA

としてのスキルだけでなく、「報連相」やコミュニケーション力など、社会に出た際に役立つスキルが向上したと実感し、SA活動を通じた教育であったことが理解できる。

4. まとめと今後の展望

SA活動を通じて実感した様々なスキルの向上や自身の成長について、大学院生のTAを対象とした先行研究と比較したことで、自身の経験が本当に価値のあるものだと理解し、成長やスキル向上にさらに自信を持てるようになった。もともと消極的だった自身が、SA活動にチャレンジしたことで得られたものは本当に価値あるものだったという想いから、本学科の後輩や他の短期大学生にもぜひSAを経験し、成長を実感してほしいと願っている。

さらに、ICTスキルを学ぶ授業でSAを経験したからこそ感じた「対話」の重要性と、これからの社会では「対話」が重要であると考え理由についてはポスターセッションで報告し、学生生活で身につけるべきスキルとその方法についての考察につなげたい。

今後は、SAを希望する学生や、SAを導入する短期大学の増加に貢献するよう、SA活動やその成長、向上するスキルについて、より詳細に探究していきたい。

謝辞

「情報リテラシー」担当教員である松山東雲短期大学現代ビジネス学科 助教 川北輝先生には、SA活動に際してご指導やご助言、活動終了後の振り返りなど丁寧に関わっていただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

岩崎千晶, 田中俊也, 竹中喜一, & 川瀬友太. (2012). 関西大学における教育補助者を活用した活動, 授業実践の動向分析—学部生・院生の教育力活用制度の全学展開に向けて—. 『関西大学高等教育研究』(3), 53-67.